

規範性問題と実践的合理性

鴻浩介 (Kosuke BISHAGO)

東京大学大学院人文社会系研究科

一般に「規範性問題 (The Normativity Problem)」と呼ばれる一つの問題が、ここ 10 年ほどの間、合理性にまつわる分析哲学的研究において激しい論争を巻き起こしている (e.g. Broome, J. 2005. “Does Rationality Give Us Reasons?”; Kolodny, N. 2005, “Why Be Rational?”; Raz, J. 2005. “The Myth of Instrumental Rationality”)。その内容は極めてシンプルなものだ。すなわち、はたして我々は合理的にふるまうべきなのか？ そしてもしそうだとすれば、なぜ合理的にふるまうべきなのか？ 本発表では特に我々の行為に関する実践的合理性を主題として、この規範性問題をめぐる考察を行う。

まずは、そもそもどうしてこのような問いが生じうるのかを確認することから始める必要がある。合理性が真正の意味において規範的なものであることは長らく哲学的常識の一つとして扱われてきたからである。この確認作業は主として、「合理性」、「規範性」あるいは「理由」といった、時として思った以上に多義的でありうる概念が、規範性問題の議論においてはどのような特定の意味で用いられているのかを明らかにすることを通じてなされるだろう。すなわちここで問題になっているのが「客観的合理性」に対比される「主観的合理性」であること、あるいは「評価的規範性」に対しての「当為的規範性」であること、などを示してゆくことになる。

その上で議論を規範性問題そのものの考察へと進める。合理性が規範的ではないこと示すものとされる「ブートストラッピング論法 (The Bootstrapping Argument)」とその対応策である「スコープ拡張 (Wide-Scoping)」について概観したのち、合理性がなぜ規範的であるのか、という問いへの解答としてこれまで提案されてきたものを検討する (e.g. Southwood, N. 2008. “Vindicating the Normativity of Rationality”; Bratman, M. 2009. “Intention, Practical Rationality, and Self-Governance”)。

ただし、発表者はこうした既存の提案が未だ完全な解答には至っていないものとする。規範性問題はなおも未決の問題なのである。その点を示すことをもって、本発表の結びとする。